

「日々の理科」(第 2272 号) 2020, 10, -1

「八ッ場ダムの水陸両用バス (6)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

八ッ場あがつま湖をめぐる水陸両用バス「にやがのはら号」は、陸上と湖上の両方から風景を楽しめる。出発して前半は、ダム建設によって新しくできた道路を走る。



座席は満員だが、基本的に窓はなく、常に外気が入ってくるので、感染拡大の心配はない。窓ガラスの代わりに、丈夫なビニールシートを開閉できるようになっているのだ。



水陸両用バスといっても、軍用車のように湖岸線のどこからでも湖に進入できるという便利なものではない。専用に作られた緩傾斜のアプローチ道路からゆっくり進入する。この道は、新川原湯温泉駅の裏手にあり、ダム湖の水位がどんな状態でも、バスが安全に進入できるように設計されている。ただ、ガイドさんの話では、最低水位と最高水位が決まっていて、稀に使用できなくなることもあるという。



陸から湖に進入する場面は、このツアーで一番のハイライトで、「スプラッシュ・イン」と呼ばれている。湖の手前で一旦停止したあと、ガイドさんの声に合わせて「スプラッシュ！」と声を出す「儀式」がある。



これが湖に飛び込んだ瞬間。水しぶきは大変なものだが、実際に水を大量に浴びるのは前面ガラスだけで、側面からはほとんど入ってこなかった。衝撃もあまりなく、「ドバーっ！フワーっ」という感じだった。



近くの橋の上からは、その様子を観察できる。まるで小型船の進水式のような。普通の船舶では、進水式は一回のみだが、この車両は、一日5回も進水式を挙行している。そもそも「バスの進水式」というのも、誠に珍しい光景だろう。